

「今、私の晴雨計は！④」

「日銀考—もう一つの

出口リスクと二人の文学者」

平山 征夫

森友・加計問題に加え、財務省・

防衛省の決裁書の改ざんや派遣部隊の日報隠し発覚、更には財務省の事務次官によるセクハラまで起こって、安倍政権は末期症状を呈している。これまでの私の財務省との関わりからは、忖度はあり得ても改ざんは想定外だった。ましてセクハラ問題はあくまで個人の資質によるものだ。ここへきて一強を誇った安倍内閣の揺らぎが注目されている。少なくとも内閣支持率低下は一過性で終

わるとは思えず、安倍三選は難しくなったように思う。

安倍政権の崩壊が現実になったらと想定して思い至ったことがある。それは日銀の出口リスクということだ。通常は異次元の金融緩和を修正する際に生ずる長期金利の上昇リスクなどを意味するが、私の言うリスクは別だ。4月以降も日銀総裁として黒田氏の続投が決まった。順当との受け止めが支配的であったが、私は今回の総裁再選は問題のある人事と思っている。安倍総理の所謂「お仲間人事」の問題については、以前「日銀総裁論」で書いたので、私の基本的考えを再度述べることはいないが、「アベノミクス」と歩調を一にする「異次元の

金融緩和策」を推進し、六度インフレターゲット達成時期を先延ばしにしながら緩和策を続けてきた黒田氏を再任したことは、デフレが解消され政策転換する時に危惧される長期金利上昇、いわゆる「出口リスク」とは別のリスクを抱えることとなったからだ。それは、金融政策を巡る中央銀行の独立性問題が生ずるリスクだ。日銀総裁の任期は五年、再選された黒田氏の任期2023年4月までであるが、お友達人事の任命者である安倍政権はそこまでは続かない。黒田総裁の任期中に政権交代は必ずある。そうでなくても先延ばし策が採れない消費税10%引き上げを控え、「デフレ脱却」宣言をしたい総理にとって、

これ以上の日銀の2%インフレ達成時期の遅れは、次第に政策矛盾を惹き起こしかねない。そのこと以上にリスクとして私が指摘するのは、もし政権交代した時、次の政権が「アベノミクス」という「リフレ政策」と異なる政策を掲げた場合、総理と日銀総裁の経済・金融政策の方向がずれるというリスクが生ずる。そのことを指摘したいのだ。中央銀行総裁を自分の都合の良い人事で選んだことが、安倍政権の崩壊時には「アベノリスク」に転じるのだ。もし一致させようとすれば、任期中で辞任するか、政策転換するかだが、日銀の独立性が疑われるなど、いずれにしても国民からの信用を失うことになるので採れない。

場合によって日銀はかなり困難な試練を与えられることになるかもしれない。という安倍政権の長期安定を望んでいるように思われかねないので敢えて敷衍するが、私はリフレ政策論者ではない、従って現政権にも日銀にも政策的にはアンチの立場で、以前から双方の早期交代を望んでいた。さあ、これからどうなるか、もう一つのリスクを注目してゆこうと思っている。

日銀と言えば、旧聞になるが2月20日、日銀出身で現代俳壇の重鎮・金子兜太氏が逝った。98歳という長寿だったが、俳句関係者を中心に多くの人に惜しまれての逝去だった。金子さんは一九七四年まで日銀におられたので、一

九六七年入行の私とは七年間同じ職場にいたことになるが、残念ながら直にお目にかかる機会はなかった。ただ、入行後暫くして金子さんの俳壇における活躍振りと併せて組合闘士だったことを先輩たちから聞いた。代表作の一つである「銀行員ら朝より蛍光す 烏賊のごとく」という作品が、神戸支店の様子（暗いので朝から机の蛍光灯を付ける）を詠ったものだと言われた。前衛俳句に馴染んでいなかった私には評価はできなかった。

東京帝国大学を卒業して日銀に入行した金子さんは、当然幹部候補だった。しかし、海軍主計中尉として戦地に赴き、トラック島で部隊は孤立、多くの同胞が餓死

するという凄惨な戦争体験をした後、奇跡的に生還帰国し日銀に復職した金子さんは「戦闘的リベラリスト」（自称）に変わっていた。トラック島を去る船上から非業の死を遂げた同胞に手向けた句「水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る」がある。復職後は日銀労働組合の初代事務局長に就任、戦後の組合運動の先頭に立った。闘い振りは人事局前の廊下座り込みストなどかなり激しかったようだ。戦争の理不尽さへの怒りの発露でもあったのだろうか。幹部候補生の変身に銀行も驚き、脅したり賺したりしたようだが、信念は変わらず、そのためか10年間3つの支店を転々と都落ちさせられた。日銀での出世を放棄し

た金子さんは、その反動のように俳句に励んだ。本店に戻っても発券局での金庫番という閑職だった金子さんは「私は窓際族ではなく、窓奥族だった。でもお蔭で創作に専念出来た」と言っている。

時代はかなり後になるが、金子さんが不遇をかこった、神戸支店に私も勤務した。そして金子さんと一緒に仕事をした経験のあるOB行員が懐かしそうに金子さんの話をしてくれた。本店の俳句部の女性たちもそうだった。よほど人間的に魅力があったのだろう。金子さんの訃報に接して「一度お会いして話を聞きたかった」と強く思った。合掌

金子兜太という日銀出身の文学者に想いを致す時、その対照的

存在としてもう一人の日銀出身の文学者を思い出す。学徒動員で戦艦「大和」に乗り込み、その最期を体験した吉田満氏だ。吉田さんは大和の最期から奇跡的に生き残ったが、帰還後両親の家の近くに疎開していた作家吉川英治氏に薦められその体験記を書いた。「戦艦大和ノ最期」である。

漢字とカナ交じりの文章は不沈艦と言われた大和の最期を見事に伝え、吉川氏にも「名文である」と絶賛された。発表時にはGHQの検閲に引っかかり順調に出版されなかったが、23歳の若さで吉田さんが書いたこの名文は今も広く読まれている。

“満さん”の愛称で親しまれた吉田さんは、日銀の幹部候補生と

して要職を歴任しながら文筆活動を続けられた。国債局長、監事を務められたその職歴は金子さんとは対照的だった。吉田さんは監事の途中56歳の若さで人生を閉じたところまでは金子さんとは対照的だった。長生きしていたらもっと多くの作品を残されただろうと惜しまれる。満さんは日銀芸部の支柱だった。多くの文学愛好者が満さんのもとに集っていた。私の人事部時代の上司だった東忠尚氏もその一人だ。彼は「日銀を飛び出した男たち」という非常に面白い人物評伝を書いているが、よく親しみを込め、満さんのことを話していた。幸い吉田さんからは私は直接話を聞く機会に恵まれた。昭和42

年に日銀に入行、5月に秋田支店に配属になったが、その秋東北の4つの支店の同期が青森に集まった。その時吉田さんは青森支店長として、我々新入行員に講話をしてくれた。白髪の混じり始めた品の良い物静かな風情、噛みしめるような話しぶりは今でも印象深く残っている。死生を超えた人間にしかない達観した落着きが強く伝わってきた。そしてかなりの時を置いて私は吉田さんと同じ仙台支店長になり赴任した。管轄は宮城県と庄内地方を除く山形県と岩手県の3県だ。そして盛岡市に出かけ宮沢賢治と石川啄木を生んだこの地の風に触れながら、知り合った盛岡のある人から「吉田満さんは文学の仲間が出

来たこの盛岡をこよなく愛し、盛岡に行くことを「あたかも小宅に帰るがごとき心境なり」とよく言っておられた」という話を聞いた。確かに仙台は土井晩翠くらいで盛岡ほど文学の香りはしなかった。その仙台支店長を吉田さんの過ごした文学体験の足跡を訪ねる時間もなく、私は四か月弱で仙台を引き払い新潟知事選に出馬した。

金子さんと吉田さん、五歳しか違わず同じ時代を同じ大学・職場で過ごし、戦争体験をその作品の中に深く沈めて生きたこの二人の文学者は、日銀では全く異なる道を歩んだが、今振り返ればそのことより共に立派な文学作品を残されたことに感動を覚える。そ

うした文学者を輩出した職場に
25年奉職し、ほんの少しながら
その風にあたっていたことを思
い出しながら改めて感じている。

(平成30年6月4日)

追記：インターネットで金子さんの履歴の
確認をしていたらおもしろいイラストがあ
ったので模写してみた

